

釜山第一小学校について：在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉， 継雄

九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門国際教育環境学講座：教授

<https://doi.org/10.15017/7364835>

出版情報：国際教育文化研究. 4, pp.1-17, 2004-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



釜山第一小学校について

——在朝鮮「内地人」学校の事例研究——

稲葉継雄

はじめに

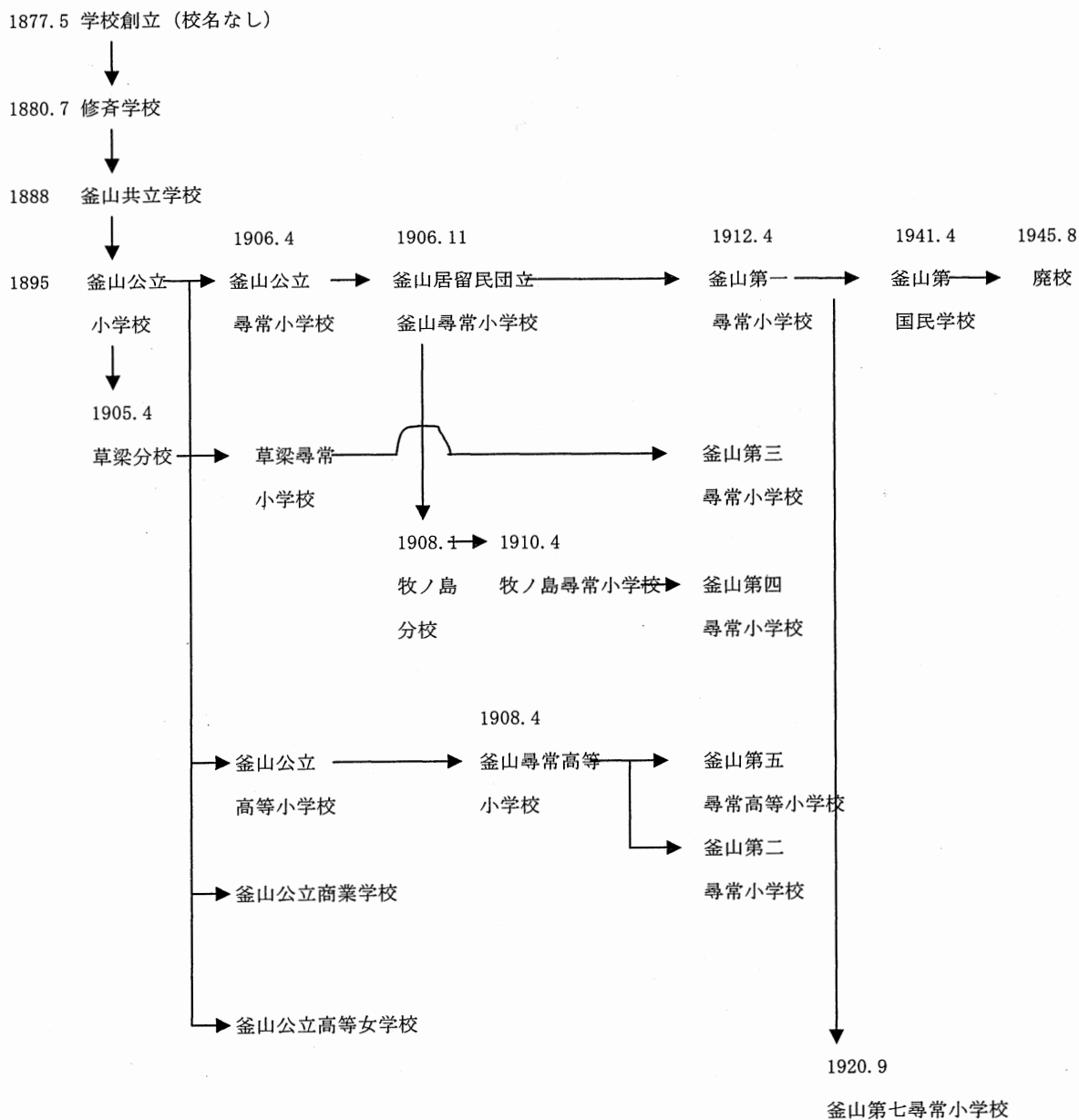
1876年3月「日朝修好条規」に基づいて釜山が開港され、日本人の朝鮮移住が始まった。そして早くも翌1877年の5月、釜山の地に日本人小学校の基が開かれた。これが、「朝鮮は勿論、邦人の外国に於ける学校教育の鼻祖」⁽¹⁾であった。日本人の海外進出はそれ以前からあったにも拘らず「邦人の外国に於ける学校教育の鼻祖」が釜山に誕生した理由を小島勝は、「韓国の場合、修交条規の締結という「身の安全」が保証されて、家族挙げて移住するということがみられた。したがって、単身で外国へ渡る場合に比してすぐさま、子どもの教育問題が浮上し」⁽²⁾たとみている。

発足当時名もなき寺子屋に過ぎなかったこの教場は、1880年修斉学校～1888年釜山共立学校～1895年釜山公立小学校～1906年4月釜山公立尋常小学校～同年11月釜山居留民団立釜山尋常小学校～1912年釜山第一公立尋常小学校と発展する過程で、分校や校区分割を通じて釜山第二・三・四・五小学校を生み、「殆ど小学校中の母校とも称すべきもの」⁽³⁾となった。のみならず釜山公立小学校の男子補習科と女子補習科は、それぞれ釜山（第一）商業学校・釜山高等女学校の母体となった。すなわち釜山公立小学校は、釜山の多くの初等・中等学校にとってもルーツなのである。

したがって、旧韓国～朝鮮の内地人教育を追究するにあたって同校の事例研究を欠くことはできないが、その関係資料は、同校の伝統の割には多くない。釜山第一小学校の後継者とされる現・釜山光一初等学校には歴史資料室が設けられ、歴代校長と日本側の「ニュー釜山会（旧釜山公立小学校の会）」によって鋭意資料収集の努力が続けられているが、筆者が訪問した2003年3月当時、本稿に利用できるものは僅かであった。このため、第二章の記述に「〇〇〇については不明」という箇所がいくつもあること、第三章以下が貧弱にならざるをえないこと、を予め断わっておきたい。

一．学校沿革

釜山第一小学校とその関連校の沿革を略図で示せば次のとおりである。以下、これを解説する形で論を進める。



1877年5月、釜山居留民会議所事務員上野敬介を教師として、13名の児童に読書・算術・習字の教授が始められた。校名もない、いわば釜山版寺子屋のスタートであった。

1878年と1879年には、児童数の増加に伴って教場の移転と教師の交替を繰り返した。すなわち1878年は、居留民会議所の一室から内大庁に移って医師半井湛四郎に教授を委任し、1879年は、東本願寺釜山別院で輪番平野恵粹をして教導の任に当たらせた。

1880 年、初代領事近藤真鋤が就任、教育熱心な近藤は、領事官舎の一部を校舎として提供した。居留民会は、元長崎中学校教諭越矩房を聘して校長とし、校名を「修斉学校」と定めた。

1888 年、居留民会の決議によって校舎を新築することになり、5 ヶ月を要して同年 12 月竣工したので、これを機に修斉学校は、1885 年以来東本願寺釜山別院に併設されていた女兒学校を合併して「釜山共立学校」と改称した。

1889 年には日本の「小学校令」に基づいて校則を改め、尋常科・高等科の修業年限を各 4 ヶ年とした。こうして体制を整えた釜山共立学校に、1891 年 5 月教育勅語謄本が、翌 1892 年 9 月明治天皇の御真影が下賜された。ここまでの経緯を日本政府との関係からみると、次のようにいえるであろう。

当初は、日本政府の協力なしの純然たる民間での設立でもあった。創立から数えて三年の後、領事館が梃子入れし、一〇年の歳月を経て「正規」の小学校として認められ、一五年かかって……内地の臣民教育機関として“一人前”の体裁を整えているのである。⁽⁴⁾

1895 年、釜山共立学校は、校名を「釜山公立小学校」と改めた。この校名変更は、釜山居留民会と東本願寺釜山別院との「共立」から釜山居留民会による「公立」へという意味合いが強い。

1900 年の「改正小学校令」および同「施行規則」に基づいて高等科の修業年限を 3 年に改め、同時に男子 3 ヶ年、女子 2 ヶ年の補習科を設置し、1901 年 4 月の新学期から実施した。

1902 年 10 月、前年から建設されていた大庁町の新校舎が落成、これに移転した。この新校舎は、2 年後の 1904 年 12 月不審火によって烏有に帰し、1906 年 1 月再建された。

1905 年 1 月、京城～釜山を繋ぐ京釜線が開通、釜山居留民の増加に拍車がかかったが、草梁に拠点を置く京釜鉄道会社は、社員子女の教育のため、校舎および職員宿舎を建築し毎年 500 円を居留地役所に提供するという条件で学校の開設を申し出た。これを受けて居留民会は、1905 年 4 月釜山公立小学校草梁分校を開設し、訓導米野康太郎が分校主任として経営にあたることになった。

日露戦争終結後の釜山居留民急増の結果、釜山公立小学校は 1906 年 4 月、釜山公立尋常小学校・草梁尋常小学校・釜山公立高等小学校・釜山公立商業学校・釜山公立高等女学校の 5 つに細胞分裂した。すなわち、釜山公立小学校の尋常科と高等科がそれぞれ尋常小学校・高等小学校として独立、同時に草梁分校も草梁尋常小学校として独立し、釜山公立小学校男子補習科と同女子補習科を前身として釜山商業学校と釜山高等女学校が発足したのである。釜山公立小学校の正式後継者の地位は釜山公立尋常小学校に与えられ、校地・校舎・御真影・教育勅語謄本その他備品一切が引き継がれた。

1906 年 11 月「居留民団法」が施行され、釜山公立尋常小学校は「釜山居留民団立釜山尋常小学校」となった。次いで 1907 年 1 月、在外指定学校となり、同年 9 月、在学児童および卒業者の他学校への入学・転学等に関し日本国内の市町村立小学校と同等と認められた。

1908 年 1 月、牧ノ島（現地名で絶影島・影島ともいい、牧島・牧之島・牧の島と表記する場

合もある)に釜山居留民団立釜山尋常小学校牧ノ島分校が設置された。(1910年4月、牧ノ島尋常小学校として独立)

1910年8月韓国併合が断行され、暫くは旧韓国時代の教育体制が維持されたが、1912年4月、朝鮮総督府の各学校官制・規則が公布され、釜山の各小学校には番号が付されることになった。すなわち、釜山尋常小学校は釜山第一尋常小学校、草梁尋常小学校は釜山第三尋常小学校、牧ノ島尋常小学校は釜山第四尋常小学校となったのである。また、釜山高等小学校は1908年4月釜山尋常高等小学校になっており、これが1912年4月、釜山第五尋常高等小学校となった。釜山第二尋常小学校は、釜山尋常高等小学校の尋常科を分割する形で1912年4月に新設されたものである。したがって釜山第二尋常小学校は、もともとの本家たる釜山公立小学校～釜山尋常小学校～釜山第一尋常小学校にとって分家の分家にあたるわけである。

1920年9月、釜山第一小学校と同じ大庁町内に、校区を分割して釜山第七尋常小学校が新設された。これが釜山第一小学校の最後の「子生み現象」であり、第七小学校の前後に開設された釜山第六・八・九・十小学校は、第一小学校と直接の縁はない。

釜山第一小学校は、朝鮮最古の日本人小学校として、また釜山・慶尚南道地域の名門校としてその名を誇ったが、1941年4月、内鮮の全小学校と同じく「国民学校」に改編され、1945年8月、日本の敗戦とともに消滅した。しかし、現・釜山広域市立光一初等学校は、釜山第一・第七小学校(国民学校)の後継者であることを認めており、両校の出身者と光一初等学校との交流は、21世紀の今日も続いている。光一初等学校は、1946年、釜山第一・第七国民学校の跡地に開設された南一国民学校と東光国民学校が、1998年9月に統合されたものである。

二. 教員の去就

1. 校 長

釜山府・釜山教育会が1927年に発行した『釜山教育五十年史』に附録として収録された「釜山第一公立尋常小学校旧職員表」をみると、上野敬介・半井湛四郎・広沢(平野の誤り——稲葉註)恵粹の職名欄は空白であり、越矩房から「校長」となっている。1880年に修斉学校を称する以前は、学校というより寺子屋であり、したがって校長はいなかったというのであろう。現に、上野敬介は釜山居留民会議所の事務員、半井湛四郎は医師、平野恵粹は東本願寺釜山別院の僧であって、専任の教師ではなかった。

一方、筆者の手にある『釜山第一公立尋常小学校要覧(大正3年2月調査)』によれば、上野・半井・平野・越は、それぞれ1・2・3・4代の校長である。釜山第一小学校側では、すでに1914(大正3)年当時から、初期の教師を校長と認識していたことがわかる。ここでは便宜上、『釜山第一公立尋常小学校要覧』のナンバリングに従うこととする。

上述の「釜山第一公立尋常小学校旧職員表」には1927年までの旧職員の就職・退職年月日が記されているが、第1～14代校長の在任時期は次のとおりである。

1代	上野 敬介	1877.5	～1877 末
2代	半井湛四郎	1878 始	～1878 末
3代	平野 恵粹	1879 始	～1880 始
4代	越 矩房	1881.7.22	～1889.2
5代	武光 軍蔵	1889.2.27	～1891.2.28
6代	小谷 茂実	1891.2	～1891.7
7代	武光 軍蔵	1891.8	～1898.3
8代	板垣 益二	1898.4.14	～1898.12
9代	太田 久武	1898.12.9	～1900.8
10代	国井 泉	1901.1.31	～1905.1.17
11代	高橋 恕	1905.2.24	～1906.7.6
12代	鈴木総次郎	1906.7	～1911.12.3
13代	遠藤 徳郎	1911.12	～1919.10.6
14代	山田 類蔵	1919.10.29	～

一見して明らかなように第1～3代の在任期間はごく短く、第4代の越矩房が実質上の初代校長であったといつてよい。前述のように越の前職は長崎中学校教諭であったが、越が赴任する前1878年当時の教場は内大庁にあった。内大庁は、かつて対州侯の使者が朝鮮官吏と応接した所である。そして釜山第一小学校は、最終的に大庁町に落ち着くことになった。そもそも釜山自体、昔から対馬・長崎との縁が深かったが、釜山第一小学校も、その例に漏れなかったのである。

武光軍蔵は、第5代と7代の2期にわたって校長を務めた珍しい経歴の持ち主である。第5代校長を辞した理由は不明であるが、第7代校長には「父兄の懇請により」⁽⁵⁾再登板することになったという。1898年3月以降暫くの消息は掴めないが、1911年5月当時は平安北道・日新普通学校の教監、すなわち朝鮮人小学校の事実上の校長であった。

武光軍蔵が第5代校長を辞任し第7代として復帰するまでの間は、第6代校長小谷茂実と池谷則臣校長心得によって繋がれた。小谷・池谷や第8代校長板垣益二、第9代校長太田久武の釜山一小関係以外の経歴は不明である。

第10代校長国井泉は、在任中の1903年7月、京城の横山弥三、仁川の三城教蔵、木浦の戸川真菅を釜山に招集して「在韓聯合小学校長会」を開催している。当時は群山・元山を含めて韓国に6校の日本人小学校があったが、その中心は釜山であり、国井泉が小学校長会のリーダーであった観がある。

1905年1月に釜山公立小学校長を辞した国井は、同年10月、韓国学部学政参与官として日本モデルの教育改革を進めていた幣原坦の斡旋により韓国官立高等小学校(在京城)のお雇教師として復活する。これが日本の国家権力をバックとした韓国でのいわゆる「模範教育」の発端であった。幣原坦は、これについて次のように述べている。

……十月一日ヨリ前釜山日本人居留地小学校長国井泉ヲ聘傭シテ教鞭ヲ執ラシメタリ（月俸八十円）是レ政府ノ手ニヨリテ公然小学教育ニ日本人ヲ入レタル端緒ニシテ目的トスル所ハ教育ノ根底ヲ改善シ国民ノ常識ヲ増シ日本語ヲ普及シテ日本教育ノ感化ヲ与ヘ他日発表セントスル国民教育案ノ素ヲ成サントスルニアリ⁽⁶⁾

1906年9月、韓国学制改革によって普通学校体制がスタート、国井泉は春川普通学校の教員に任命された。しかし、国井は病気を理由にほどなく辞任、教育界の第一線から退いた。後任は、後述する堀惣次郎であった。

第11代校長高橋恕は、1906年4月に釜山公立小学校から釜山尋常小学校（後の第一小）・釜山高等小学校（後の尋常高等小～第五小）・釜山高等女学校が分離独立するや暫く3校の校長を兼ね、同年7月から後2者の校長兼任となった。この兼任は1910年9月まで4年余続き、以後1919年9月までの9年間は釜山高等女学校の専任校長であった。このように高橋恕は、釜山公立～釜山尋常小学校長をはじめ釜山教育界の重要ポストを歴任した大物であった。

第12代校長鈴木総次郎は、釜山高等女学校の創立から3ヶ月同校の教諭を務め、1906年7月、釜山尋常小学校の校長となった。高橋恕が、3校兼任の一部を鈴木に託した形である。その後鈴木は、1911年12月京城に出て龍山小学校長となり、1917年まで務めた。だが、龍山小学校長としての鈴木の評価は、あまり芳しくない。当時の部下教員のひとは、次のように冷評している。

上州は赤城山の麓から鈴木総次郎校長が見えた。ピンとはね上がった美髭は中々厳めしかったが、関八州で名を挙げた忠次のような俠気は更になく見受けられた。むしろ神経質で小心な所があって、各方面に大小の問題が起こった。⁽⁷⁾

第13代校長遠藤徳郎は、1908年6月、福岡県から渡韓して釜山居留民団立釜山尋常小学校の訓導となり、1911年12月、鈴木総次郎の京城転出に伴って校長に昇任した。まだ30歳そこそこであった。したがって、遠藤の校長としての真価は、次の任地群山において発揮されたものとみられる。群山では、本務である群山尋常高等小学校長（1919～36年度）の傍ら群山実科高等女学校長（1919～20年度）、群山高等女学校長（1921年度）、群山高等女学校教諭（1922～34年度）、群山簡易商業専修学校長（1919～21年度）、群山商業補習学校長（1922～36年度）を兼務した。1930（昭和5）年頃の遠藤は、次のように絶賛されている。

昭和五年春、私は母校群山小学校に赴任した。今思ってもその頃は本当に夢のようだ。遠藤先生はこの頃最も円熟した、名実共に全鮮一を誇る校長として最大の手腕を発揮された。全北はじめての公開授業、著作「学校経営の実際」の刊行、校旗、校歌の制定、各方面からの感謝状、表彰や、叙勲などまさに小学校長として最高の荣誉に輝いたことだった。私にとって先生は恩師でもあり、校長と部下職員の関係であり、同僚職員であり、私はよく叱られ、注意され又ほめられもした。とに角私の現在に至るまで四十三年に涉って一貫した教員生活の基礎をこ

の大校長の下に築き上げられたことは私の教員としての最大の幸運であった。⁽⁸⁾

群山で教職生活を終えた遠藤徳郎は、再び釜山に戻った。熟年に達した遠藤は、釜山福岡県人会および釜山高等女学校父兄会（3女と4女が釜山高女卒）の重鎮であった。

第14代校長山田類蔵は、釜山尋常高等小学校～釜山第五小学校の訓導（1906～14年度）から釜山第二小学校長（1914～19年度）を経て釜山第一小学校長となった（1919～30年度）。続いて釜山高等小学校（第五小）の校長（1931～33年度）を務めている。すなわち山田の釜山勤務は、第五小に始まって第五小に終わったわけであるが、在任期間としては第一小学校長が最も長い。

第15代校長加藤章は、1930年釜山第一小学校の訓導となり、翌年から3年間（1931～33年度）校長を務めた。その後は慶尚南道視学（1934～37年度）として教育行政に携わった。ちなみに加藤校長は、「釜山第一小学校校歌」の作詞者である。

第16代校長豊田操の在任期間は1934～39年度であった。つまり満州事変～日中戦争勃発を経て次第に戦時色が強まりつつあった時期である。そのためか、釜山第一小学校関係者の間で豊田校長の思い出が語られる時必ず登場するのが「愛国運動」である。『釜山第一小学校昭和十五年卒業生会誌』には次のような記述がある。

あるグラフ雑誌社が、愛国運動を撮影にきたことがあった。縦横整然と並んで走るための訓練は、大変なものであった。この日、豊田校長はとても張り切って、先頭に立たれた。愛国運動は男女共、パンツかズロースだけの裸で、そして素足で参加するのが良しとされた。毎朝冷水浴を励行されていた豊田校長は卒先して、模範を示された。上半身は裸だからいうことはないが、下半身につけておられたのは、白いステテコであったように思う。

猿又ではなく、又カッコよいランパンやトレパンでもなかったように思う。今なら、小学校の低学年といえども、女生徒は人前で裸になりたがらないが、当時は六年生の女生徒まで健気にも裸で走った。中には既に立派な、ボインちゃんもいた。⁽⁹⁾

豊田操は、釜山第一小学校長の後晋州第一小学校長（1940年度）、晋州第一国民学校長（1941年度）、晋州吉野国民学校長（1942～43年度、以後不明）を歴任した。

第17代校長鈴木重名は、朝鮮人教育から内地人教育に転じた。すなわち釜山普通学校長（1930～33年度）から釜山第三小学校長（1934～39年度）となり、次いで釜山第一小学校長となったのである。1940～43年度の釜山第一小学校（国民学校）長在任は確認できるが、いつ辞任したかは資料不足で確認できない。

最後の校長（第18代）竹林為助も、鈴木重名と同じく朝鮮人学校から内地人学校に移ったが（釜山第三・第一とも鈴木の後任）、竹林の経歴はかなり複雑である。亀浦普通学校長（1927～33年度）であった竹林は、1934年4月、釜山普通学校長となった。鈴木重名の後任である。しかし、釜山普通学校長は1934年度だけで、翌年には慶尚南道視学となり、さらにその翌年からは道視学と釜山女子高等普通学校教諭を兼ねた（1936～37年度）。続いて晋州第一小学校（晋州第一普通学校を改名）の校長となり（1938～39年度）、内地人学校に転じて釜山第三小学校

～釜山第三国民学校の校長となったが、「朝鮮総督府職員録」には1943年7月までの同校在任を裏付ける記録しかない。したがって、釜山第一小学校の最期を看取ったことは確かであるが、釜山第一国民学校（当時）の校長就任年月日は明らかでない。

釜山第一小学校は、朝鮮最古の伝統を誇る名門日本人学校であっただけに、歴代校長にも国井泉・高橋恕・遠藤徳郎など朝鮮教育界の有名人が少なくない。しかし、彼らの名声は、釜山第一小学校長としてよりも、むしろその後の活躍によって得られたものである。換言すれば、釜山第一小学校は、名校長への登龍門的な機能を果たしたとみることができる。この点、京城日出小学校の校長が、他校ですでに校長経験を積んだ元老級が就くポストであり、彼らの多くにとって教職生活のゴールだったのとは異なる。

2. 訓 導

1904年6月から釜山公立小学校訓導であった米野康太郎は、1905年4月草梁分校主任となり、1906年4月草梁小学校の独立とともに同校校長、1912年4月には校名変更に伴って釜山第三小学校長となった（1914年度まで在任）。米野の分校転出が、釜山小学校の細胞増殖に伴って本家から分家へと教員が異動した嚆矢である。以下、これに類する例を紹介しよう。

1906年4月の5校分岐に際して釜山公立小学校訓導から釜山高等小学校訓導となったのは瀧本申平・加藤マチ・林辰治・手島雄象・木野照・星野善随の6名である。

瀧本申平は、修斉学校時代の1881年から在任していた、いわば釜山公立小学校の主的な存在であった。いったん高等小学校に出たものの再び本家の尋常小学校に戻り（1909～10年度）、その後蔚山湾小学校長となった（1914年度まで）。

林辰治は、1906年4月の高等小学校訓導就任時から事実上の校長格であった。名目上の校長は、前述したように高橋恕の兼任だったからである。林は、1910年9月、晴れて釜山尋常高等小学校長となり、1912年4月以降は釜山第五小学校長として1914年10月まで勤続した。

手島雄象も、瀧本申平と同じく、高等小学校に転出したものの1908年4月尋常小学校に復帰し、1913年7月、他校の校長となって再転出した。校長在任校は、釜山第四小学校（1913～16年度）と梁山普通学校（1917年度）であった。

木野照は、1906年4月釜山高等小学校訓導となったが、僅か3ヶ月で釜山高等女学校教諭に転じた。

星野善随は、釜山高等小学校ばかりでなく、後述するように釜山第二小学校でも最初の訓導のひとりであった。

釜山高等小学校が尋常高等小学校となった1908年4月には、古原八郎が本家の尋常小学校から異動した。

1906年4月に釜山公立小学校訓導から釜山商業学校教諭となったのは北山喜一と戸倉英太郎である。北山は、1年後の1907年5月には辞任しているが、戸倉は、1915年5月まで同校（この間、1912年に釜山商業専修学校と校名変更）に勤続した。

釜山公立小学校から釜山高等女学校の開校に参じた者も3名いた。遠山テル・南合舜了・三

科コトである。遠山は1908年11月まで、南合は1910年9月まで、三科は1916年10月まで在任した。また上述の木野照が、高等小学校を経て1906年7月から翌年11月まで釜山高等女学校に勤務した。

牧ノ島分校の職員名は確かめえないが、1910年4月にこの分校が牧ノ島尋常小学校として独立した際、岩津藤一・飯田勝正・小島芳太郎が釜山居留民団立釜山尋常小学校訓導から牧ノ島尋常小学校訓導となっている。

岩津藤一は、牧ノ島小学校、そして釜山第四小学校の初代校長でもあった。釜山四小には1913年7月まで在任、その後朝鮮人教育に転じて昆陽普通学校(1913～18年度)・河東普通学校(1919～22年度)の校長を歴任した。

飯田勝正の牧ノ島勤務は、僅か半年であった。その後釜山尋常高等小学校～釜山第五小学校の訓導(1910年10月～1916年4月)を経て校長となり、亀浦小学校(1916～18年度)・釜山第六小学校(1919～25年度)・釜山普通学校(1926年度)に勤務した。ちなみに釜山六小では初代校長であった。

小島芳太郎は、牧ノ島小学校の独立に続いて1912年4月の釜山第二小学校創立にも参画している。釜山二小には1922年4月まで10年勤続した。

釜山第二小学校開校時に教頭格だったのが、前述した星野善随である。星野は、本家(釜山公立小学校)から分家(釜山高等小学校～尋常高等小学校)へ、さらに分家の分家(釜山二小)へと異動したのである。釜山二小には1914年12月まで勤め、また元の分家(この時の校名は釜山五小)に戻って1917年9月まで在任した。

釜山二小の開校に本家(当時は居留民団立釜山尋常小学校)から直接馳せ参じたのが小原政照である。小原の釜山二小在任は、奇しくも星野善随と同じ1912年4月～1914年12月であった。

1920年9月、釜山第一小学校の新たな分家として釜山第七小学校が開設され、本家から八尋太八郎と朱雀タキが異動した。八尋の在任は僅か4ヶ月であったが、朱雀は、1927年まで7年余勤続した。

以上みたように釜山公立小学校～釜山第一小学校は、本家として、分家が枝分かれするたびに多くの人材を供給した。釜山公立小学校～居留民団立釜山尋常小学校の訓導が初代校長となった草梁小学校(釜山三小)・牧ノ島小学校(釜山四小)はその典型であり、釜山高等小学校(釜山五小)もこれに準じる。この意味で釜山の内地人諸学校(第一・二・三・四・五・七小学校、商業学校、高等女学校)は、教員の人脈上も親戚関係にあり、単なる制度上の本家・分家ではない。

次に釜山公立小学校～釜山第一小学校で平訓導であった人々の校長歴を見てみよう。この学校が、釜山のみならず慶尚道一帯における初等学校長養成のセンターであったことを裏付けるためである。前述した米野康太郎・瀧本申平・林辰治・手島雄象・岩津藤一・飯田勝正を除く校長経験者は次のとおりである。

戸川真菅は、1898年11月、九州(本籍は佐賀県)から渡航して釜山公立小学校の訓導となった。その頃、全羅南道木浦に東本願寺木浦別院の手で木浦小学校が開設されたが、木浦小学

校は1902年1月、東本願寺から木浦居留民会に移管された。この時校長として招聘されたのが戸川真菅であった。戸川がいつまで木浦に滞在したのかは明らかでないが、一時帰国を挟んで1919年11月には全羅南道青山島・青山小学校の校長となり、続いて済州島に渡って朝天普通学校（1921年7月～1922年8月）と大静普通学校（1922年9月～1925年3月）の校長を務めた。青山小学校と朝天普通学校では初代校長であった。

堀惣次郎は、釜山公立小学校在任（1901年3月～1905年3月）の後韓国官立鎭洞小学校の教員となり、1906年9月韓国政府の手によって普通学校が新設されるや春川普通学校の教員となった（国井泉の後任、1906～11年度）。「朝鮮教育令」の施行後校長に昇任し、黄海道の載寧普通学校（1911～15年度）・沙里院普通学校（1916～23年度）・海州第一普通学校（1924年度）に勤務した。

ト倉富太郎は、釜山公立小学校から釜山尋常小学校にかけて7年半（1904年10月～1912年4月）在任し、その後10年余で5校（いずれも慶尚南道所在）の校長を務めた。その校名と時期は、下端小学校（1912年度）・亀浦小学校（1913～15年度）・居昌小学校（1916～17年度）・下南小学校（1918～20年度）・沙上普通学校（1921～22または23年度）である。

仲西威則は、釜山公立小学校時代から14年（1906年2月～1920年4月）にわたって勤続し、釜山第一小学校教頭から校長として牧ノ島普通学校に転出（1920～25年度）、富民普通学校校長（1925～27年度）も務めた。

荒木三七は、釜山一小では中堅の訓導であったが（在任1908年3月～1914年9月）、釜山郊外に出て校長となった。その校長歴は、新文小学校（1915～19年度）・辰橋小学校（1920年度）・下南普通学校（1922～27年度）・昌善普通学校（1928～37年度）と確かな分だけで22年に及ぶ。

古賀松三は、17年余（1908年3月～1925年11月）に及ぶ在任期間の終盤（1923年4月～）は釜山一小教頭であり、慶尚南道・新方普通学校の校長（1925～30年度）として転出した。

田坂松太郎は、釜山尋常小学校赴任は古賀松三より遅かったが（1910年4月）、釜山一小教頭としては古賀の前任者（1921～22年度）であった。その後12年（1923～35年度）にわたって馬山小学校長を務めた。

村瀬保二郎は、釜山第一小学校訓導（1912年11月～1917年3月）の後慶尚南道4校の校長を務めた。熊川小学校（1917～19年度）・熊川普通学校（1920～23年度）・梁山普通学校（1924～30年度）・咸陽普通学校（1931～33年度）である。

樋口三芳（釜山一小在任1913年7月～1918年4月）の校長経験が確認されるのは機張普通学校（1918～19年度）のみである。

片山房治は、釜山一小の中堅訓導（1916～22年度）から慶尚南道の普通学校に転出して校長となり、昌寧普通学校長（1923～24年度）・背屯普通学校長（1925～35年度）・郡北普通学校長（1936～37年度）を歴任した。

亀崎定治郎も、片山房治と同時期（1916～21年度）の在任で、待遇も同等（月70円）の釜山一小中堅訓導から慶尚南道・洛東小学校の校長（1922～28年度）となり、続いて宜寧普通学校長（1929～31年度）・昌寧普通学校長（1932～37年度）・釜山镇小学校長（1938～39年度）を務めた。1940～41年度の話はつかめないが、1942年には「奏任官ノ待遇ヲ受クル国民学校訓導」

として釜山蓬萊国民学校長に就いている。

見野浩は、片山房治・亀崎定治郎よりもさらに若手の釜山一小訓導（1918～23 年度）であったが、校長として転出、その校長歴は進礼小学校（1924～30 年度）・加祚普通学校（1931～36 年度）・機張普通学校（1937 年度）・機張小学校（1938～40 年度）・花津国民学校（1941～43 年度、以後不明）と 20 年以上に及んだ。

有馬清憲の釜山一小在任は 1919～36 年度の 18 年にわたり、終盤 6 年間は教頭であった。その後草梁普通学校～釜山草梁小学校（1937～38 年度）・鶴城小学校（1939 年度）の校長を務め、1940 年度は不明であるが、1941～43 年度は奏任官待遇の三浪津国民学校長として「朝鮮総督府職員録」に登場する。

筒井義久は、前任校の慶尚南道・鎮東小学校では校長（1918～19 年度）であった。ところが、釜山一小に赴任するや平訓導（1920～24 年度）となり、1 年間の教頭（1925 年度）をステップに密陽小学校長（1926～29 年度）として転出した。

山口環は、釜山一小訓導（1922～26 年度）の後釜山六小訓導（1927～30 年度）を経て校長となった。校長としての勤務校は、いずれも慶尚南道の沙上普通学校（1931～37 年度）・固州小学校（1938～40 年度）・固州国民学校（1941 年度）・馬山国民学校（1942～43 年度、以後不明）である。

杉茂は、釜山一小の中堅訓導（1922～27 年度）から海雲台小学校の校長（1928～32 年度）となり、天加普通学校長（1933 年度）も務めた。

相良茂は、釜山一小の平訓導（1923～30 年度）～有馬清憲教頭の次の教務主任格（1931～32 年度）を経て、杉茂の後任の海雲台小学校長（1933～35 年度）となった。

仲田恭而は、釜山一小の平訓導（1924～29 年度）から密陽普通学校で教頭（1930 年度）となり、続いて密陽小学校で校長（1931 年度）となった。

大塚正男は、釜山一小訓導を 10 年（1924～33 年度）にわたって務めたが、最終的に教務主任格止まりで、教頭を経験することなく泗川小学校の校長（1934～35 年度）として転出した。

増田多満亀は、釜山一小では末席に近い平訓導（1925～26 年度）であったが、釜山郊外に出て 4 年目には校長となり、昆陽小学校長（1930～33 年度）・昆明普通学校長（1934 年度）・水谷普通学校長（1935～37 年度）～水谷小学校長（1938～39 年度）を歴任した。

木田浩は 13 年（1925～37 年度）にわたって釜山一小に在任し、最後の 1 年だけ教務主任格であった。翌年度から校長となり、漆北小学校～漆北国民学校（1938～41 年度）・釜山第七国民学校（1942 年度）・温陽国民学校（1943 年度、以後不明）に勤務した。

稲恒肇（多くの資料で稲「垣」となっているが、稲「恒」が正しい）の釜山一小在任時期（1925～38 年度）は木田浩とほぼ重なり、稲恒は木田よりも下に位置したが、1939 年 3 月、いきなり昌寧小学校長に任命された。しかし、稲恒自身はこれを、「昌寧にとばされ」⁽¹⁰⁾たと認識している。結果的に敗戦まで昌寧に勤続した。

高橋勝は、1926 年、末席訓導として釜山一小に着任し、在任末期（1932 年度）に漸く中堅の域に達したが、転出先では校長であった。校長在任校は下端小学校（1933～35 年度）・柳谷普通学校（1936～37 年度）～柳谷小学校（1938～39 年度、以後不明）である。

垂水秀男の釜山一小在任は僅か1年(1927年)に過ぎなかったが、釜山普通学校の教頭(1928～29年度)を経て校長となり、密陽小学校(1929～32年度)・熊川普通学校(1933～37年度)～熊川東小学校(1938～39年度)・宜寧邑内小学校(1940年度)～宜寧邑内国民学校(1941～42年度)に勤務した。

緒方信義は、釜山一小(1928～31年度)と釜山高等小(1932～33年度)では中堅訓導であったが、東萊第二普通学校の教頭(1934年度)を経て校長となった。校長としての勤務校は松溪普通学校(1935～37年度)～松溪小学校(1938年度)・大可第一小学校(1939年度)・凡西国民学校(1943年度)で、1940～42年度および1944年度以降は不明である。

戒能孝一郎は、釜山一小勤務(1933～37年度)の最後の1年間が教頭で、この後東萊第二小学校～東萊第二国民学校の校長(1938～43年度、以後不明)を務めた。

以上のように、釜山公立小学校～釜山第一小学校の元訓導で他校の校長となった人は枚挙に暇がない。教頭から校長として転出するのは当然の人事であるが、釜山一小の場合は、教頭を経験せず、教務主任あるいはそれ以下の中堅訓導から直ちに他校の校長となる人が多かったことが特徴である。この点の詳しい追跡は、「朝鮮教育令」が施行され「朝鮮総督府職員録」に初等学校教員の氏名等も掲載されるようになった1911年末以降について可能であるが、釜山一小の教務主任以下から直接他校校長となった例は、管見の限りでも荒木三七・村瀬保二郎・片山房治・亀崎定治郎・見野浩・杉茂・相良茂・大塚正男・木田浩・稲恒肇・高橋勝など十指に余る。これをもって、釜山一小が釜山一帯の初等教育界で高いプレステイジを誇っていた最大の証左とみることができる。

逆に筒井義久のように、農村部の小学校では校長であったのが、釜山一小に赴任すると平訓導のポストしか与えられないというケースもあった。これまた、釜山一小の地位を物語る人事例である。

このほか釜山共立学校～釜山公立小学校時代の教員であった井手光治・莊司新左衛門・吉村伝について附言しておきたい。井手は、1900年当時釜山開成学校教授を、莊司は、時期は不明であるが釜山開成学校の嘱託を兼ねた。また吉村は、1905年5月、釜山から京城に出て一進会立光武学校の教師となった。これらは、旧韓末のいわゆる「日語学校」に対しても釜山公立小学校が教員の供給源として機能した実例である。

三. 釜山第一小学校の「学校文化」

釜山第一小学校の文・武面での成績をみると、同校を1922年に卒業して釜山中学校に進学した竹下文雄は、「私は第一小学校の出身で、かなりの友達がそのまま中学の同級生になった」⁽¹¹⁾と述べている。また、釜山第一小学校を1940年に出た米田宏によれば、「ドッチボールが盛んであった。釜山で一番強かった」⁽¹²⁾という。いわば身内による主観的な自己評価である。釜山第一小学校は、最古の伝統校であるだけに当然、初期のころは文・武両面において釜山のトップであった。しかし、小学校の数が増えるにつれ、その地位は相対的に低下した。そして昭和期に入ると、「一番愛校心があるのは四小。……(中略)……一番出来る子が多いのは六小」⁽¹³⁾

という評価が定着したようである。

次に掲げるふたつの引用は、大正デモクラシー後の新教育においては第二小学校が、スポーツでは第六あるいは第二小学校が釜山のトップであったという証言である。前者は、1924年10月から1938年3月まで第二小学校訓導であった松田栄治、後者は、1931年4月から1941年8月まで第六小学校訓導であった村瀬昇による。

郷土教育、技能手工芸教育、図画・図案教育、算数教育、学校劇、放送教育、そして音楽教育等々と挙げれば際限もない程教育の全分野にわたってわが釜山二小は画期的な発展を遂げた事は、卒業・在学生の皆さんと共に大いに誇るに足るものであります。……（中略）……げに釜山公立第二尋常小学校は初等教育のメッカであり、あらゆる教育分野における草わけ的存在でありました。そして私は今でもこの釜山二小の教員であったことに非常な誇りを持っております。⁽¹⁴⁾

市内の小学校対抗リレーやドッチボール大会には、全教師一丸となって熱心に指導をし、いつも優秀な成績を修めた。いつも張り合うのは、第二小学校であった。⁽¹⁵⁾

釜山第一小学校の武の側面に係わって附言しておきたいのは、乃木希典大将との関連である。釜山一小の校庭には、建立の時期は定かでないが、乃木大将の銅像があった。戦前の日本では、内地・外地を問わず校庭の銅像（石像）は二宮金次郎が一般的で、乃木大将は稀であった。そして、第16代豊田校長時代、「愛国運動」と並行して始まった釜山一小の「鍛錬遠足」は、毎月の13日、つまり乃木大将の命日に実施するのを例としたのである。ちなみに「鍛錬遠足」の内容は次のとおりである。中には、往復48Kmを走破する猛者もいたという。

この日は、日の丸弁当に限られた。当然、菓子・果物も禁じられた。ある学年以上だったと思うが、列を組まずに各人自由に競って、目的地の海雲台に向った。午前九時が出発時間であった。学校から、十二～十三Km以上の一Km毎の地点に先生方が先着し、十二時前後に到着する生徒を待っていた。吾々はそこで先生から到着距離を示す札をもらい、昼食をとって、午後一時になると引返した。午後四時までに学校に帰り、各学年毎に札を集計した。そして、最も遠距離に行った生徒や、各学級の平均距離が発表された⁽¹⁶⁾

次に、釜山第一小学校と朝鮮人社会との関係をみておこう。そもそも釜山の日本人居留地では、すでに日清戦争以前から日本人の現地人差別が横行していた。1892年6月に初めて朝鮮に渡った中井錦城（本名喜太郎、後の京城居留民会民長）は、上陸地釜山で目の当たりにした日本人の横暴ぶりを次のように記している。

夕飯を喰ひにさる宿屋に入り、其の二階から町を眺てみると、日本人が韓人を苛酷に取扱ふのが目に付く、それが二三十分間に四五度も韓人を撲るのである、中にも燈心の包を負ふた韓

人が、夏の夕方の熱さに堪へ兼ね、路傍の井戸で水を飲んでゐる処を、其の背後から十歳許りの日本人の男の子が、燈心を一本づゝ引出してゐる、気の付た韓人が後を振向て子供を叱ると、子供の親が店から飛出して、突如^{いきなり}韓人を引仆し、蹴るやら踏むやら大騒ぎだ⁽¹⁷⁾

このような日本人（おとなばかりでなく、その尻馬に乗った子どもたちも）の差別・横暴はしかし、日本人の朝鮮語学習を排除するものではなかった。むしろ積極的に学ぼうとする姿勢があり、日本人児童の朝鮮語学習は、1880年7月の修斉学校の成立とともに開始されている。当時の教科目名は「韓語」で、1894年6月までは必修科目であった。

1895年、校名を改めた釜山公立小学校は、英語・韓語の随意科教育体制を維持するとともに、「予習科」を新設し、朝鮮人に日本語その他の予備教育を施した上で本科生に編入するシステムを設けた。1895年8月5日付の『教育時論』は、「釜山には、韓人子弟十名余を入校せしめ、日本生徒と一様の教授をなせり。漸次他学校にも此の如き方法を施行せば、他日の成果大に宜しからん」と報じている。

このような教育体制を裏付けるものとして、『釜山教育五十年史』の「釜山第一公立尋常小学校旧職員表」には日本人韓語教員・朝鮮人嘱託などが含まれている。彼らの氏名・職名・就職年月日・退職年月日は次のとおりである。

中村喜一郎	韓語教員	1881.4	
上川 国夫	〃	1892.4.17	
大石 明	韓語嘱託		1902.4
李 義直	嘱 託		1904.4.1
朴 琰植	〃	1904.4.1	1905.3.13
金 命澤	〃	1905.3.15	1905.6.7
張 太守	〃	1905.3.15	1905.8.1
林 英奎	〃	1905.9.4	1907.2.20

このリストから推測すれば、修斉学校以来の朝鮮語教育、釜山公立小学校以来の「予習科」体制は、続いていたとしても1907年2月までだったことになる。ちなみに1907年2月という時期は、日本の保護国としての韓国を支配する統監府が開設されて丸1年にあたる。

併合後も、第一小をはじめとする釜山の各小学校は、朝鮮人に対してほぼ完全に門戸を閉ざした。釜山第三小4年生に転入し、その後1926年に第二小を卒業した金允中は、「小学校は第一から第八まであったが、韓国人としての小学生は小生一人だった」⁽¹⁸⁾と回想している。

おわりに

釜山第一小学校の校歌および校訓は次のとおりである。

校 歌

- 一. 万朶桜日に映ゆる 大和心の跡とめて
港釜山の中央に 我が学びやは聳えたつ
- 二. 緑したゝる向陽の あけの光を身にあびて
常磐の松の美しく 正しく強く生ひ出でん
- 三. 高き理想の実現を 栄ある歴史思ひつゝ
昇る朝日の心もて とはに尽さん諸共に

校 訓

愛 国……よい日本人となりませう
健 康……つよいからだで
協 同……仲よく力をあはせ
努 力……何事も本気に
進 取……何事も第一に

校歌の「港釜山の中央に」「栄ある歴史思ひつゝ」、校訓の「進取……何事も第一に」といった文言に朝鮮随一の伝統校の誇りを読み取ることができる。筆者がインタビューを通じて受けた印象でも、釜山第一小学校関係者の誇りや愛校心は、他校に勝るとも劣らぬものがある。しかし、いわゆる「本家（宗家）意識」は、ほとんど感じる事がなかった。この点、釜山第一小学校の京城版である日出小学校の場合とは異なる。筆者のみるところ、釜山第一小学校と京城日出小学校の主な違いは次の3点である。

①釜山第二小学校や第六小学校の台頭に伴い釜山第一小学校は、中等学校進学競争やスポーツ競技において必ずしも釜山地区のトップではなかった。これに対して京城日出小学校は、スポーツは扱置き中等学校進学に関しては、京城のみならず全朝鮮を通じて随一の名門校であった。

②歴代校長の人事をみると、京城日出小学校は、多くの校長にとって教職歴の掉尾であったが、釜山第一小学校の場合はそうでもない。

③京城日出小学校における「統監～総督のお膝元意識」が、釜山第一小学校にはない。換言すれば、日本の国家権力との距離感が異なる。

これらの要因が京城・釜山の初等教育界における「本家意識」の濃淡に影響したのではないか、これが筆者の憶測である。

註

(1) 釜山府・釜山教育会 『釜山教育五十年史』 1927年 自序 p.3

(2) 小島 勝 『日本人学校の研究』 玉川大学出版部 1999年 pp.26-27

- (3) 森田福太郎編 『釜山要覧』 釜山商業会議所 1912 年 p. 50
- (4) 小島 前掲書 p. 27
- (5) 『釜山第一公立尋常小学校同窓会名簿』 No. 3 釜一小会 1977 年 3 月 p. 2
- (6) 『日本外交文書』 第 38 巻第 1 冊 日本国際連合協会 1958 年 p. 870
- (7) 『龍山小学校史・龍会史』 京城龍山公立小学校同窓会龍会 1999 年 p. 108
- (8) 斎藤鎌二郎 『風霜の碑文』 私家本 1996 年 pp. 144-145
- (9) 『釜山第一小学校昭和十五年卒業生会誌』 1976 年 pp. 24-25
- (10) 同 上 p. 5
- (11) 亀峰会編 『幻の名門校<釜山中学回想記>』 リベラル社 1988 年 p. 64
- (12) 『釜山第一小学校昭和十五年卒業生会誌』 p. 23
- (13) 片山美代子 『花暦——双葉の章——』 私家本 2001 年 pp. 84-85
- (14) 『釜山二小会会報 うさぎ山』 第 2 号 1979 年 1 月
- (15) 『釜山第六小学校松島会誌 まつしま』 第 2 号 1974 年 3 月 p. 8
- (16) 『釜山第一小学校昭和十五年卒業生会誌』 p. 25
- (17) 中井錦城 『朝鮮回顧録』 糖業研究会出版部 1915 年 p. 3
- (18) 『釜山中学回想記』 p. 110

Fuzan Daiichi Shogakko

—a case study of a *naichijin* (Japanese) school in colonial Korea—

Tsugio Inaba

The Opening of Pusan Harbor on March 1876, based on “Corean-Japanese Amity Regulations of 1876,” marked the beginning of Japanese immigration to Korea. An elementary school for Japanese children was built in Fuzan (Pusan) as early as in May, 1877, and that was the start of Japanese school education abroad.

The school, which ultimately came to be known as Fuzan Daiichi Shogakko (Fuzan First Elementary School), experienced the division of the school district and the creation of its branches, Fuzan Daini-Daigo Shogakko (Fuzan Second-Fifth Elementary Schools). In that sense, Fuzan Daiichi Shogakko was a “head of the family” for many elementary schools in Fuzan.

Yet Fuzan Daiichi did not have as strong pride as Hinode Shogakko, its counterpart in Keijo (Seoul). Their differences can be summed up in the following three points:

- (1) With the rise of its branches like Fuzan Daini Shogakko and Dairoku Shogakko, Fuzan Daiichi Shogakko could not always keep the leading position academically and in sport competitions in the Fusan district. Hinode, on the other hand, was by far the top (at least academically) throughout Korea.
- (2) While Hinode was the ultimate career goal for many elementary principals, Fuzan Daiichi was not.
- (3) Fuzan Daiichi did not have a sense of closeness to the Governor General like Hinode. In other words, Fuzan Daiichi acted at a distance from Japanese state power.